



※第0回（プロローグ）はこちら

↓ ↓ ↓ ↓ ↓

<http://p.booklog.jp/book/101278>

\*\*\*\*\*

7

キュリ・キュリ・キュリ・キュリ・キュリ・、

愛用の懐中時計の螺子はさほど緩んでもいなかった。手持ち無沙汰のあまり、日に十回は巻き直しているのだから当然だ。クルクルと螺子を回す動きにあわせ、真鍮製の小さな蓋がオイルランプの光を鈍く反射する。そういえば最後に磨いたのはいつだったろうか。“こんなに暇な船旅なら、手入れ道具を持ってくれば良かった”クライブ・ヨレン准尉は益体も無い後悔を抱く。

「う、ぐ、ぐええええッー」

狭い船室の反対側からあられもないえずきが聞こえ、青年はうんざりした顔で時計から眼を離れた。天井から吊り下げられたオイルランプは船体が波に弄ばれるたび不規則に揺れ、屎尿桶を恋人のように抱きしめてじっとうずくまる老人の影はまるで下手なダンスを踊っているかのごとく壁や床を行ったりきたりしている。ランカニス。——アークメイジ・ランカニス。短く刈り込まれた白髪。小柄だが衰えのまったく感じられない身体つき。精悍さの漂う浅黒い顔は今ほどい船酔いで見る影もなく、眉間に走る皺の数は陸にいたときの倍以上に増えていた。

“本当に魔法とやらが使えるなら、船酔いくらい簡単に止められそうなものなのに”

このレイセニア号に乗り込むまでは、ランカニスは今と打って変わってひどく饒舌だった。クライブが聞き手として上等でないことなどものの一分もかからず理解できたであろうに、彼は二日半にわたる馬車旅の間じゅう、ほとんど一方的に喋り続けた。といっても、その中身といえはお定まりの天気の話からはじまり、クライブの所属に端を発する軍部の話だったり、窓の外を通り過ぎる羊の群れについてだったり、最新式の通信装置の特許争いについてだったり、大昔に

駆け落ちした娘夫婦のことだったりとか、とにかく俗っぽい話題ばかりで、その所作からはおとぎ話に出てくる魔法使いが具えているような神秘性や厭世的な雰囲気などは微塵も感じられなかった。

“――そういえば、あのときの話の中に船や海が好きだという自慢はなかった気がする”

タニンガム港からレイセニア号に乗り込んで海原に出た途端、ランカニスは激しい船酔いに苛まれた。そのおかげで旅の間じゅう続くかと思われたお喋りはぷつりと途切れ、流石に辟易としていたクライブも幾分の安堵を覚えたものだった。

“時化が収まるか陸に上がるかしたら、この老人はまたぺらぺらと喋り出すんだろうが”

クライブたちに宛がわれた狭い船室は薄暗く、不潔で、餿えた臭いが漂っていた。

だがそれは別に、あの海賊然とした風貌のジョン船長が彼らを冷遇しているというわけではない。薄暗いのは木造船でのオイルランプの使用が極力控えられているせいだし、床のそこかしこにネズミの糞が散らばっているのは船員たちの寝室も似たようなものだ。そして狭い空間に充満する酸っぱい臭いの根源は、言うまでもなくランカニスの胃液である。

「うぐっ……、うげっ、うごぼっ………、げろぼぼおおおおおオッー」

断末魔にも似た老人のえずき。

壁板の向こうに砕け散る荒波の音。

煤けたオイルランプのガラスにばたばたと体当たりを続ける蛾の羽音。

決して心地よいとはいえないそれらの室内楽に耳を傾けながら、クライブ・ヨレンはこれから自分が滞在することになる街、<sup>ヌーヴォ・シティ</sup>“成り上がり都市”アーヴィタリスへと思いを馳せるのだった。

▽           ▽           ▽

夢がゆがんだ。

▽           ▽           ▽

突然視界が晴れた。直前までの薄暗い船室の光景はまぼろしのように消え去った。代わりにクライブの意識が捉えたものはあのときの、あの光景だった。

頭上には夜明けの白い空。足元にはレイセニア号の甲板。水平線の先には埠頭や倉庫の長い列、その向こうの煙突の輪郭までもがはっきり見えるようになった、アーヴィタリスという街の雑多で膨大な遠景――……

そして舳先寄りの欄干に登り、下半身をむき出しにしている、逞しい老人の後姿。

“――ッ！”

クライブの反応はあのときよりも早かった。何故ならこれから老人が何をするつもりなのか、今の青年はもう知っているから。体当たりしてでも止めるつもりでクライブは駆けだす。が、両足は甲板の上を全力疾走しているはずだというのに、視界に映る老人の背はまったく近づくことがない。まるでだだっ広い砲撃演習場で、太陽を目掛けて走っているかのように。

そして、清々しい朝の潮風に白い<sup>しも</sup>下の毛を靡かせながら、アークメイジ・ランカニスは悠々とこちらを振り返る。そのふてぶてしい横顔には、昨夜までの船酔いで憔悴していた跡など微塵も見られることなく。

伸ばした指は、夢の中でもやはり届くことがなく。

逞しい足が、欄干を軽く蹴り。

朝日にきらめく海原へと、魔術師は落ちていく、落ちていく、落ちていく――

▽           ▽           ▽

「待てッ！」

あのときと同じ台詞を叫びながらクライブは上半身を跳ね起こした。

途端、ズキリという鈍痛が右側頭部に走り、青年は背を丸めてうめき声を漏らす。二日酔いとは違う外傷の痛み。両腕で頭を抱えたくても出来ない――左腕は厚い包帯と三角巾で固定されている。清潔な布に包まれた二の腕にはひりつくような強い痛みがあり、どうやら刃物か何かでかなり深くまで切りつけられたらしかった。

どうして自分はこんな怪我を負っているのか。

そう考えると同時、雷に打たれたような勢いで昨夜の記憶が蘇った。――くよき風のはじまり  
亭での不快な酒盛り。ドロッグ・ソーヴォという名のチンピラと風呂屋の暖簾をくぐった  
こと。“蛇の舌べろ”と自称する太った情報屋に法外な手数料をふんだくられたこと。人気の無い湾  
岸通りを照らす蟲の翅の青。血臭ただよう廃工場の闇。指先を焦がすマッチの熱さ。全身に刃物  
を括り付けられた加工生命の男。そして何の前触れもなく現れて、そいつを一刀両断した異国装  
束の――

“.....なんだったんだ、あれは”

奇妙な格好をした女に叩きのめされたのまでは覚えている。あの鉄鞘の一撃で自分はあっけな  
く気絶して、それから.....それから、何がどうなったのだろうか？ 少なくとも生きてはいる。  
否、それどころかあの廃工場から運び出されて、きちんとした手当までされている。“だが、  
誰が？”

クライブは痛む頭に気を使いながら、あらためて周囲を見渡した。寝かされていたのは床に直  
接敷かれた木綿の寝具だった。傍らには、丁寧に折りたたまれた自分の上着がある――ただし左  
袖は裂けたままだし、落としきれない血痕がそこかしこに赤い斑模様を描いていた。

“.....ここはどこだ？”

その部屋はおかしな作りだった。少なくともクライブにはそう感じられた。

一辺五メートル強くらいの正方形の部屋の床には干草を丁寧に編んだ板（？）が規則的に敷き  
詰められており、鼻を抜けるような青臭さがうっすらと漂っている。右手側の壁面は細い木の棒  
を縦横に組み合わせたもので、棒と棒のあいだには光が透けるほどの薄い紙が張られていた。ど  
うやら時刻は昼間のようなのだが、外がどうなっているかまではわからない。背後のやけに低い棚の  
上には頭が大きくて黒目も大きな白猫の陶器、壁に掛かった縦長の絵画には崖を横切る鳥が墨色  
のみで描かれている。正面の白い壁は厚紙を張り合わせたものらしく、腰の高さあたりに取っ手  
と思しき金具のくぼみがあるところから、どうやら壁そのものがスライド式の扉になっているら  
しい。

「――お目覚めになりましたかな」

夢の終わり際に叫んだ声を聞きつけられたのだろう。ほどなくして、その紙張りの扉板がスッ

と横滑りして開いた。

「怪我の加減はいかがか、御客人」

とってこちらの容体を窺うは、まるで子供のように小柄な老人——それもランカニスが若造かと思えるほどに齢を重ねた大翁だった。

萎びた矮躯。顔中に深く刻まれた皺と皺。平均寿命が五十歳程度と言われる世間でこれほど歳を重ねた人間と遭遇するのはもはや珍しく、容貌から推測するのは難しかったが、少なくとも八十歳より下ということはあるまい。ひょっとしたら百の大台をとうに超えているかもしれない。

わずかに残った頭髪も、くっきりした眉も白一色で、元の毛髪が何色だったかはわからない。だが落ち窪んだ金壺眼は炭のような黒、そして染みだらけの皮膚ははっきり黄色がかっており、この相手が自分たちとは違う民族であることを、クライブにも一目瞭然に知らしめていた。“マヤト人か”

「……多少の痛みはありますが、なんとか大丈夫なようです。どうやら丁寧に手当てしていただいた様で、本当にありがとうございました」

クライブは可能な限り丁寧に礼を述べる。老人は笑って手を振り答えた。

「それは善哉。手前どもの身内の医師いわく、腕のほうは骨にも神経にも異常は無かったようですが、さすがに頭の中の具合までをも覗くわけにもいきませんからな」

恐らく日常的にこちらの言語、つまり西方タリシア語を使い慣れているのだろう。異郷生まれの老人の発音には独特の訛りが残るものの、聞き苦しいというほどではまったくない。

老人は座したまま深々頭を下げると、引き戸の手前から膝のみで前進し、まだ寢床にいるクライブと話をしやすい距離にまで近づいてきた。一体それがどういう意味やルールを持つ作法なのかは知らないが、少なくとも礼を尽くさんとする類のものであることは感じられる。

「——申し遅れました。それがし姓をクオンザン<sup>久遠山</sup>、名をジロエモン<sup>次郎衛門</sup>と発します。ですがこのように古びたマヤトの姓名<sup>あざな</sup>、御客人の舌には馴染まぬでしょう。差し障り無ければそれがしのことは、“ジロウ”とでもお呼びください」

「自分は……、クライブ・ヨレンと言います」

所属を告げるのは躊躇われた。何せマヤト人であるということ以外、相手の素性は全く知れないのだ。老人の態度と言葉遣いは限りなく丁寧であるものの、しかしこちらのことを手放しで歓迎しているわけではないことくらいはクライブにも察せられていた。間を置くことなく彼は訊ねた。

「その……ここは？」

「流民街の、〈鬼の住処〉ですよ」

"――オニ?"耳慣れない単語に彼は戸惑う。こめかみがズクンと疼いた。頭痛が思考を阻害しているようだった。「すみません。自分はアーヴィタリスにやってきてから日が浅く、街の事情に明るくないのです。貴方のおっしゃる〈オニの住処〉とは、いったい……？」

「これは失礼をばいたしました。流民街とはつまり、アーヴィタリスに点在するマヤト人の  
ゲッター  
特別居住区。我々はその流民街における、そうですね、自警組織のようなものです」

アーヴィタリスにおける自衛組織といえば、クライブ自身も世話になっている <sup>シティガード</sup> 街警団 のことがまず思い出される。しかし関係を問うと、ジロウ氏は苦笑とともにかぶりをふった。

「我々は、むしろ街警団の方たちからは疎まれる立場ですな。こちらとしては敵対するつもりなど毛頭ござらんですが、やれ困ったものです」

「では、貴方がたは……？」

「その前に、ですな」

問い重ねようとするクライブを制し、老人は言った。

「卒爾ながらこの次郎衛門、クライブ殿に折り入ってお尋ね申さねばならぬ儀がございます。これはあるいは、この街に住むマヤト人のすべてに罌が及ぶやも知れぬ事柄故――単刀直入の言問いと相成りましょうが、どうかお許しくださいませい」

「はあ、……はい」

小柄な老人から発せられる得体の知れない迫力に押され、青年は曖昧に頷くことしか出来ない。ジロウ氏は続けた。

「お尋せねばならぬのは無論、昨夜のことです。果たして御貴殿は場末も場末のあの廃工場に、いかなるご用向きで足を運ばれたのでありましょうや。それも聞けば、この街に赴任されからまだ日の浅いというーサンクタリス本邦の士官殿が？」

「……………」

クライブは言葉を失う。自分がアーヴィタリスにやってきてから、まだ丸二日と経っていない。だというのに、彼が名乗りもしないうちから素性を言い当てられるのはこれが早くも二度目のことだった。“ひょっとして、自分の背中には身分証か何かでも貼り付けられているんじゃないか？”

「失礼。これを」

困惑する青年に向け、ジロウは袋状の袖口から取り出した小物を差し出す。

「工場で伏された際、服ごと血だまりに浸かる格好になったのでしょうな。内のからくりはまだ血糊が入り込んでおりました故、乾いて固まってしまう前に身内の職工に清掃をさせました。差し出がましいことだったかとは存じますが……」

疑問は瞬く間に氷解した。背中に貼り紙などしているわけがなかった。牙剥くライオンの意匠が象嵌されたその懐中時計は、カルナットの士官学校を巣立つひよこ軍人に贈られる卒業記念の品だ。他の配給装備、サーベルや軍服などは街警団の屯所に預けてきたものの、利便性と携帯性の良さゆえにこれだけは肌身離さず持ち歩いていたのである。多少事情に明るい者がそれを見れば、持ち主の出自を推し量るなど難しいことではないだろう。

渡された懐中時計は外装部分だけでなく、鎖の細かい部分まで丁寧に磨き上げられていた。この仕事をした職工といい、怪我の手当てをしてくれた医者といい、ジロウ氏の“身内”とやらには随分と手際の良い技術者が揃っているようだ。クライブは右手だけで真鍮の蓋を押し開けるー12時17分44秒。

「……ひとつ、老人の昔話にお付き合いいただけますかな」

仕切りのおすような咳払いをして、ジロウは言った。クライブの無言の首肯を待ってから、彼は語りはじめた。

「事の始まりは、今から百年以上も昔のことになり申す。このアーヴィタリスより遙か遙か遠い地で、とてつもない おおいくさ 大戦 がありました。敗れた小さな国が大きな国に併呑され、滅びた大きな

国が小さな国へと散り散りになり、野火のごとき争いが何十年にも渡って広がっていったのです。愚昧な領主がおりました。傾国の姦婦がおりました。英雄となった兵卒がおりました。――そして常に、苦しむ民草がおりました。田畑は焼かれ、家々は壊され、永きに渡る戦は人心をも荒れさせました。そんなあるときでした。狂気に取りつかれた亡国の君主が、神代より伝わる禁忌を解き放ったのです」

「……禁忌、ですか？」

「それがいかなるものであるか、仔細には誰も知り申さぬ。只、半ば御伽噺のような口伝として……『人知を超えた三つ首の怪異が暴れ回り、既に荒廃の極みにあった国土山河を虫さえも住めぬ有様に変えてしまった』……などという逸話のみが残されておりますが――……ま、今ここでその真偽は問わんでください。本当のところは知る手立てが御座いませぬ由。流行り病が猛威を振るっただけかも知れませぬ。新たな支配者となった領主が、虐殺の歴史を塗り替えようとしただけかも知れませぬ。今ここで問題となるのは、その災厄に見舞われた地の名を“マヤト”ということなのです」

島夷。東蛮人。黄禍民族。――マヤト人。

かの“暗黒大陸”のさらに彼方に浮かぶという列島の民のことを、サンクタリス連邦や周辺諸国に住む者たちはそのように呼称している。ただしこのアーヴィタリスでは、単に“流民”とも。何故この街で彼らがそう呼ばれるなったのか、クライブとてそれくらいは知っている――そう、あれは確か80年ほど前のことだったか、

「正確には、77年前の2月1日のことになりますな」まるで青年の心を読んだように、ジロウ氏は続けた。「死土と化した国元から逃れ、流浪の民となったマヤト人――その一部を乗せた船団がこの地の岸辺に漂着いたしましたのは、雪の降る寒い朝のことで御座いました。貴方がたの呼ばわれますところの“大漂着事件”……小耳に挟んだことくらいはあるのではないのでしょうか」

そう。クライブとて、それくらいは知っているのだ。

今から約80年前（いや77年前か）、当時まだ小さな漁港に過ぎなかったアーヴィタリスの村はずれに漂着したという異邦人の大船団。当時この地を治めていたマルセア公国は西の自由都市郡との紛争の真っ最中であり、突如現れた数千の異邦人を追放できる軍隊もなかったため、半ばなし崩し的に彼らの居住を認めざるを得なかった――と、歴史の教科書にだって書いている。

「むろんのこと、我々も始めからすんなりと受け入れられたわけではありません。当然でありますな。当時のアーヴィタリスの、マルセア公国の、ひいてはペリンギル大陸の人々にとってみ

れば、我々は眼の色も肌の色も、喋る言葉も、生活様式も、何もかもが違う異民族だったのでから。幸いだったのは、武力でひともみにしてしまうには我々の数が多すぎたこと、並びに当時の元首であったベドルナス・ラーゲ・マルセア大公が、憚りながら市民からは慕われていない人物だったことでありましょう。

しかし、仮令どれだけの好条件を揃えたとしても、見ず知らずの地に移り住むこと——そして見ず知らずの者たちを受け入れるということは、筆舌に尽くしがたいほど困難なものであります。不幸なすれ違い、蔑視や疎通の齟齬、互いの無理解から来る悲しい事件はまさしく引きも切らなかつた。雪以外何も無い岸边に辿り着いたあの日から、それがしは四分の三世紀にもの長きに渡ってそれを眺めてきたのです」

“自分は歴史の証人と会話をしているのか”

やや遅まきながら、クライブはそんなことに気が付いた。現在アーヴィタリスに住むマヤト人たちの子孫は数十万人いるとも言われているが、恐らくジロウ氏は、マヤト本土のことを記憶している流民一世のほとんど最後の生き残りだろう。

白い薄紙の壁の向こうで鳥の影が一瞬だけ横切った。遠くからは子供たちのはしゃぐ声がかすかに聞こえていた。老人は続けた。

「誤解なきよう申し上げますが、それがしにはマヤトを代表として御貴殿に繰り言恨み言を聞かせたいなどという心胆など些かも御座いませぬ。“大漂着事件”から77年——無数の諍いを積み重ねながらも、これまで取り返しのつかないような対立や弾圧が起きることなくやってこれたのはまさに天佑、いっそ奇跡と呼んでも差し障りはありますまい。今やマヤトの者とペリングルの方々との血も混じり、我らの望みとするのは只ひたすらに、大過なき調和と末永きに渡る繁栄に御座います。ごく一部にはマヤトの純血に固執する奴ばらも残ってはおりますが、そうした乱破者に対して睨みを利かせるのが我ら鬼瓦衆——つまり“オニ”の御役目。我らは流民街における自警組織であると同時に、身内を取り締まる憲兵としての側面もあるのですよ。されど我らの力など、所詮ごくごく細やかなもの。長い年月をかけてようやく生じた奇跡の如きこの均衡は、何時何が元凶となって崩れ去るとも知れませぬ。そう、仮令ば此度のように……サンクタリス陸軍の士官殿に対して、事情はどうあれ我々が暴行を働いたとしたらならば」

——そういうことか、とクライブは得心する。彼らが何を恐れているのか。又、自分がどうしてこのように丁重に扱われているのか。

これは政治の問題なのだ。

アーヴィタリスを含むマルセア公国領がサンクタリス連邦に加入したのはたかだか20年前のことに過ぎない。元より戦争による強制的な併合ではなかった上、首都から遠いこと、経済的に豊かなことも相まってこの地には未だ独立的な気風が強く、中央政府の差配すらも生半には届かないような状態にある。それは軍部であっても同じ――否、武力組織であるからこそ、“

サファイアファンク

青い牙”の中央軍はその活動に制限を設けられていると言ってよい。かつての公国軍はマルセア方面軍として存続しており、彼らは一朝事あったならばすぐさまサンクタリス本邦に歯向かうことができるのだ。今回クライブが単身でランカニスを監察せざるをえなかったのも、恐らくアーヴィタリス市政局からの横槍が入ったためだと容易に想像がつく。

むろんのこと、サンクタリスの行政府はこの状況を快く思っていない。為政者が権益を伸ばそうとするのはいつの時代も自然のことだ。それらを踏まえれば、ジロウ氏の言ったとおり、二等市民から国軍士官に対する暴行事件などは介入の材料としては格好である。そして、それを端緒としてサンクタリス本邦からの影響力が強まったとしたら、現在この街を治める市政局、並びに一般のアーヴィタリス市民からマヤト人への風当たりが強くなることは明々白々な事態だといえた。

“だが、何と答えればいいだろうか？”

むろんのこと、クライブは本邦政府からの密命など帯びていない。それは事実だ。かといって、事実を包み隠さずに話すのは、あまりにも……

ヨリコ

「依り子」

“――？”

その老人の呼びかけは、黙したままのクライブに対してではなかった。ジロウ氏の視線は僅かに背後に向けられていた。“ヨリコ”――またしても耳慣れない単語――誰かの名前か何かだろうか？ 応えの声の代わりに、白い紙戸が再びスツと開く。そのすぐ向こう側で両膝をついて座っていたものと目が合い、クライブ・ヨレンは驚きに声を詰まらせた。長い黒髪。眦のきつい目付き。見間違いようも無い――それは昨夜クライブを叩きのめした、あの女だ。「風禅依り子、と申します」努めて感情を押し殺したような声で彼女は言った。「昨晚はご無礼仕りました。平にご容赦を」そして彼女もまた、額が床に触れるくらい深々と頭を下げる。

「……やれやれ、困った娘だ」「ヨリコ」と入れ替わるように頭を上げたジロウ氏が嘆息混じりに言った。「申し訳ありませぬ、クライブ殿。彼女は我ら鬼瓦衆の食客にして荒事師――ご貴殿にもわかりやすく言えば、まあ、影打ち専門の用心棒のようなものでしてな。昨夜もまた、マヤトの破戒者を処するためにあの廃工場へと遣わせた次第――何ゆえもってその破戒者が破戒者たると

断ぜられたかは秘めおくことを御寛恕願いたいのですが――とにかく、彼女ならびに彼女を遣わした我らが、御貴官ならびにサンクタリス本邦に対して害する意など寸毫も持ち合わせておらぬこと、どうぞご理解賜われませぬか」

「――……」

そう言ってジロウ氏も、斜め後ろの“ヨリコ”と同じように深々と頭を下げる。

老人の禿げあがった頭頂部と“ヨリコ”の真っ黒い旋毛、それらを見るとは無しに見つつ、クライブは脳内で話を整理する。

アーヴィタリスという街において、特殊な立場にある彼らマヤト人。現在のところは目に見える対立こそ起きていないものの、たとえ一部のマヤト人が犯罪行為に走っただけでも、未だ偏見を持つ大陸民にとってそれはマヤト人全体への嫌悪感へと繋がる。それが積み重なったならば、行きつく先は弾圧か闘争か虐殺か、いずれにせよろくなものではないだろう。

鬼瓦衆――“オニ”とはそうした事態を未然に防ぐための組織であり、ジロウ氏はそのまとめ役か何かで、あの“ヨリコ”はオニの尖兵というわけか。

ドロッグの兄貴分の惨殺、全身に刃物をくくりつけられた加工生命の男、そしてあの刃物人間をあそこに閉じ込めていた何者か。クライブは己の知る範囲での昨夜の事情を並べたて、果たしてあれらのどの部分にマヤト人の破戒者とやらが関わっていたのかを思考する。だが答えに辿り着くには情報が少なすぎたし、ジロウ氏から訊いてくれるなど先回りされてしまっただけでは、興味本位で真相を尋ねることなど出来そうも無い。

ただひとつ判るのは――あくまでクライブ・ヨレンは、おかしなかたちで巻き込まれた部外者でしかないということだ。

「自分が所属する憲兵 <sup>イチマルバツ</sup> 一〇x 連隊は、軍外部の一時的な協力者を監察するのが主な役割の部署です」長い逡巡の後、クライブはそう切り出した。言葉にしにくかった理由は機密事項だからとかではなく、単に己が不明を曝すのが躊躇われただけのことである。“本当に、恥晒しなだけでしかない話なのだから”「昨日の早朝、自分は監視対象である人物に逃亡を許してしまいました。ですが彼を探そうにも、着任したばかりであるためこの街の事情はまるで詳しくなく、他にツテとなるものもなかったため、偶然出会ったチンピラの紹介する情報屋に頼るしかありませんでした。……ここから少し話がややこしくなるのですが、そのチンピラは前日に義兄弟を惨殺されており、犯人の隠れ家の手がかりを情報屋から買っていました。自分は見境をなくした彼に人殺しをさせないため、そして、情報屋が本当に信頼おけるかどうかを確かめるためにあの廃工場に赴

いたのです」

結局、殺人犯と思しき男は確かにあの場所に匿われていた。これによって“蛇の舌ペロ”の情報の正確さはある程度証明されたといえる。だが結果としてドログは斃れ、あの刃物人間も死んでしまった。“これによって、クライブ・ヨレンの無能さがまたひとつ証明されたといえる”

「要するに、自分があの廃工場に居合わせたのはただの成り行きでしかありません。加えて言うなら、自分はそのとき軍服も着ていませんでした。さらにサーベルも携帯していないとなれば、あの暗がりの中、自分を軍属だと判別するのは誰にも出来ないことだったでしょう。よってあなた方にサンクタリス軍への翻意があったとは考えられませんし、自分はこの怪我のことを本部に報告するつもりもありません」

「――お心遣い、誠に痛み入ります」

クライブが言い終わると、ジロウ氏はそう礼を述べ、再びふかぶかと頭を下げた。

「いえ、あの……」

自分の父の父のそのまた父のような齢の人物にそうまで恐縮されると居心地の悪さも極まるものだが、人生経験の足りない青年には何と言ってそれに応じるべきなのかわからない。結局、彼が次の言葉を見つけるより先にジロウ氏は頭を上げ、こう続けた。

「仮令(たとい)御寛恕いただけるとはいえ、クライブ殿に怪我を負わせて大事な公務を妨げた責は我々にあり申す。怪我が治るまで、どうぞゆるりと養生なさってください」

「……。どうも、ありがとうございます」

クライブの謝意を受けたジロウ氏はまたもや頭を下げると、膝のみの動きで後方へ下がり、用事があればいつでも呼ぶように言って部屋から去っていった。白い紙戸が閉じる寸前、ジロウ氏の横でずっと伏していた女が顔を上げた。彼女は最初から最後まで名乗りと謝罪以外は何も発言しなかった。もしかしたらジロウ氏から、余計なことは言うなと口止めされていたのかも知れない。

だがその瞬間、クライブを見た彼女の黒玉のような瞳は、どんな言葉よりも雄弁にこう語りかけていた。

すなわち、――『どうしてあたしが謝らなきゃなんないのよ』――と。

“やれやれ”

独りになった途端に疲労感がどっと押し寄せ、クライブは後頭部を枕へ沈める。こめかみのコブも確かに痛むが、それより三角巾で固定された左腕が厄介だった。このままでは柄を握るところか、尻を搔くことさえも出来そうにない。“蛇”からの使いが来るのは明日だし、他に急いすべきことも思い当たらず、今はジロウ氏の言葉に甘えさせてもらって回復に専念する以外なさそうだ。

“.....ああ、そうだ”

『すべきこと』を頭の中に浚って数秒、彼はようやく思い至る。そしてジロウ氏がいるうちに、この質問をしなかった己の人間味の薄さに暗澹とする。本来であれば起きてすぐ、真っ先にこう尋ねるべきだったのだ。

すなわち、――『自分と一緒にいたはずのチンピラは、一体どうなったんですか？』――と。

(第8回につづく)

(次回：9月22日更新予定)